

四十三 目覚めた人の説いたこと

この世界はどのようなものか、人間とはなにか、という問いをいだきながら人は生きていく。それは、決まった答えを言いがたい哲学的な問いとしてある。この問いへの実際的な態度は葬送の場に現われる。人の死はだれにとつても痛切なものだから、問いが迫ってきて神妙な心持になる。そして、その心境にふさわしいのは、事務的に済ますのではなく、厳かな雰囲気とする伝統的な儀式である。だから、江戸時代の檀家制度がまだ機能していることもあって、日本では現代でも圧倒的多数の家族が僧を呼んで読経の葬儀を営む。ただし、信仰に基づいてそれを選んでいる人がどれだけのか明らかではない。たいてい慣習に従っているだけなのかもしれない。この事情は、キリスト教がなお社会的におおやけに尊重される欧米でも、現代では似てきているのだろうか。

自分のことを正直に言えば、神社に行っても参拝しないのは厳格な浄土真宗の熱心な信者だった父母の影響だが、そのことがあるから、父母の葬儀は仏式で行ない、本来仏教とは無縁の三と七のつく年忌の法事簡略化したいと思うがも営んでいる。だが、ときどき問いを考えることのあるわたしは、信仰のない自分の葬式は僧を呼ばずにしてほしいと自

分では思っている。しかし、葬式は生き残る家族や親族のすることで、自分の考えを強制できるか疑問が残る。ここに、慣習に従う葬式仏教が存続する一因があるだろう。こう言っても、本当に信仰している人にとやかく言うつもりはない。

わたしは、親鸞と道元の名著や仏教関係の書物などをいくらか読み、新旧の『聖書』と『コーラン』もかじってみた。そして、中村元師の原始仏典の翻訳で、ゴータマ・シッダールタの肉声に近い言葉を知った。すなわち、「この世界はどのようなものか、人間とはなにか」という問いに対するゴータマの突きつめた考えを知った。そのもともとの思想は宗教ではなく、後世のインド・中国・日本の考え深い仏教者の説いたこと——とても貴重で尊重すべきだけれども——とは異なるようだ。仏教というのは仏道と翻訳した方がよく、目覚めた人(ブッダ)の思想という意味で、ブディズムという英語の言い方の方がふさわしい、と思う。わたしが自分の葬送と現代の教団僧を切り離したいと思うのは、ゴータマの思想を尊重する道を歩みたいと考えるからである。

今年、『ブッダが説いたこと』という書物が岩波文庫に加えられた。W・ラーフラという人が一九五九年に著わした『What the Buddha Taught』の全訳である。スリランカに生まれて仏門に入り、大学で長老派と大乘の両仏教を学んで仏教全般の知識を深め、さら

にパリに渡って近代的・科学的な思潮に触れた上で、世界に向けて英語で書いた仏教入門書という。分かりやすい文章で手ごろな分量のよい書物だ。このような仏教入門書が、圧倒的多数が慣習的にもせよなお寺院にむすびついている日本で、半世紀ものあいだ日本語に翻訳されていなかったことが不思議なぐらいだ。もともと、この書物は日本の大乘仏教とその宗教組織に対立的な主張を含んでいると言えなくもないので、翻訳しようとする僧が出なかったのかもしれない。ちなみに、訳者の今枝由郎という人はフランス国籍を得たチベット学者だそうだ。

スリランカの学僧ラーフラ師は、初期教団の思潮を残しながらも、ゴータマ・シッダールタの教えを現代的に説く。つまり、二十世紀の人として、ゴータマの哲学的な思想・理論を現代の科学的思考に矛盾しないように提示する。核心は、存在とその在り方についてのゴータマの理論が、古くからインドに堆積した考え方を脱し宗教とも離れ、カント的な意味での「批判」だったということである。その解釈は、科学の時代になった二十世紀、カントの継承者カッシーラーが行なったカント批判哲学の理解ともよく調和している。そのことはこの雑記帳の三十七で触れた。

文化人類学者レヴィ・ストロースも、同じような理解をその著書に記している。すでに

この雑記帳の二十五で引用したけれど、再録すると、——仏教には彼方の世界がない。すべて根本的な批判に帰着するが、人類は批判が永久に可能であることを示すはずがないので、批判の究極において、仏陀は物と存在の意味の拒否として悟るのである。それは宇宙をないものとする教理であり、宗教として教理そのものもなくするのである。……わたしは他の人から、教えを聞いた先生たちから、書物で読んだ哲学者から、西洋が誇りとしてあるあの科学からさえ、賢者(仏陀)の樹下の瞑想を接ぎ合わせて編集した教訓の断片のほかなにを教えられただろうか。——

理論以外のほかのゴータマの言行も、実践において直面する問題に対する現実的な透徹した思想と態度だ、とラーフラ師は言う。ゴータマの弟子たちの集団が時を経て教団に発展して、師の言葉は整理されて体系的な教えつまり仏典になった。ここでは、大いに覚めた理論の核心が変更されることはなかったが、經典を拡張する過程で、ゴータマと彼の言葉を表わすとされる經典に対する尊崇が、宗教色を帯びさせることになったのだろう。それが人間心理のもつ傾向である。結局、經典は、理論と実践に関して宗教色を抜きがたく織りこんでいる。

その初期經典に沿って著わされた『ブツダが説いたこと』は、ゴータマの哲学的な思想・

理論を現代的に示しながら、合わせて、仏教の尊重すべき考え方と実践を解説する。その中には必ずしも厳密な「批判」になじまないものがある、とわたしは思う。たとえば、第三章の「輪廻」は理論と完全に無矛盾でないとするのはむずかしい。けれども、長老派仏教の修行者として経典に親しんだ人は、重要と考えることをできるだけ取りあげ、敬意をはらって注釈していく。それらは、たしかに実践上有益で、人が自分を導くのに役立つと思う。

なんにもせよわたしは、この書物で、自分なりに受けとめていたゴータマ・シッダールタの思想と仏教を、より明瞭にしっかりと把握することができた。わたしの雑記帳は頭に浮かんだ主題を、あれこれ考えをめぐらせてできれば批判的に記そうとするものであるが、今回は、まったく自分のための覚書としてノートを取ることに徹した(次ページからの付録)。書き出しのとてもプライベートな調子ともつりあうだろう。

二〇一六年、七月

*

*

*

W・ラーフラ著『ブツダの説いたこと』 抜き書き

第一章 仏教的な心のあり方

〈ブツダは、一人の人間であつたばかりではなく、神あるいは人間以外の力からの啓示を受けたとは主張しなかつた。彼は、自らが理解し、到達し、達成したものはすべて、人間の努力と知性によるものであると主張した。〉

〈ブツダによれば、人間存在こそが至高である。人間は自らの主であり、それより高い位置から人間の運命を審判できる存在や力はない。〉

「自らが自らのよりどころであり、自分以外の誰をよりどころとすることができようか」
〈彼は、人間は自らの努力と知性によつてあらゆる束縛から自らを自由にすることができ
るのだから、誰であれ自分を啓発し、自分を解放するようにと教え、励まし、刺激した。〉
「あなたたちは、自ら歩まなくてはならない」

〈自己解放は人が自ら真理を実現することによつて得られる〉

〈修行者はブツダ自身のことさえも吟味すべきである、と言っている〉

〈すべての悪の根源は無知であり、誤解である。〉

〈仏教(ブディズム)で強調されているのは、「見ること」、「知ること」、「理解すること」とであり、信心あるいは信仰ではない。〉

「私はものごとの生成の消滅がニルヴァーナであると知っており、それが見えている」「汚れと不純さの消滅は、ものごとを知り、ものごとが見える人にとってのみ可能なことである」

〈常に問題なのは、知ることと見ることであり、信じることではない。〉

真理の実現は、

「彼はダルマを見、ダルマに到達し、疑念を乗り越え、ためらうことがない」、彼は正しい叡智でもって、ものごとをありのままに見る」と表現され、

自らの「目覚め」を

「目が生まれ、知識が生まれ、叡智が生まれ、知性が生まれた」と述べる。

「真実を保持する賢者が、〈これのみが真実であり、他はすべて偽りである〉と断定するのはふさわしくない」

「ある一つの見解に固執し、他の見解を見下すこと、賢者はそれを囚われと呼ぶ」

「教えは流れを渡るために乗る筏に似たものであり、保有するものではない」

(場合によっては、筏は置いていくということ)

基本の態度

修行者マールンキャプッタの形而上学的問い

宇宙は永遠か否か、宇宙は有限か無限か、魂と肉体は同一か否か、ブッダは死後存在するか否か、：

に対して答えなかった。

「宇宙が有限であるか無限であるかという問題にかかわらず、人生には、病、老い、死、悲しみ、愁い、痛み、失望といった苦しみがある。私が教えているのは、この生におけるそうした苦しみの消滅である。……マールンキャプッタよ、私がなぜ説明しなかったかという、それは無益であり、修行に関わる本質的問題ではなく、人生における苦しみの消滅に繋がらないからである」

〈ブッダは実践を教える師であり、人を平安と幸福に導く上で役立つ教えのみを説いた。〉

第二章 第一聖諦 ドウツカの本質

ドウツカ…すべてのものことは条件付けられた状態にあり、無常で移ろうものであることに由

来する本質。漢訳仏典の「苦」。

〈仏教は悲観主義でも楽観主義でもなく、しいて言えば、生命を、そして世界をあるがままにとらえる現実主義である。∴、ものごとを客観的に眺め、分析し、理解する。∴、人間と世界のあるがままを正確に客観的に説き、完全な自由、平安、清逸、幸福への道を示すものである。〉

〈純粹に精神的次元も、幸せとされる次元も、不快を超越した純粹に沈静した意識の次元も、すべてはドウツカに含まれる。〉 だから、瞑想の精神的幸せを称賛したあと、「それらは無常で、ドウツカで、移ろうものである」という言葉になる。

基本の世界観

「条件付けられた生起」 Ⅱ 「縁起」 ∴ 条件性、相互依存性の原理。

〈私たちが一般に存在・個人あるいは「私」と見なしているものは、たえず移ろい変化する肉体的・精神的エネルギーの結合にしかすぎず、それらは五集合要素(五蘊)から構成されている。〉

〈条件付けられた生起としての苦しみという面こそが、ドウツカの本質のもっとも重要な

哲学的側面である」

「これら執着の五集合要素はドウツカである」

五集合要素(五蘊)・・現象界を構成する五つの要素

- (1) 物質・・内的・外的物質の領域、目・耳・鼻・舌・身体および感知の対象。すなわち色形・音・匂い・味・物および心の感知対象となる思い・考え・概念など。
- (2) 感覚・・人間が外の世界との肉体的・心的接触によつて体験する快・不快・どちらでもない感覚のすべて。
- (3) 識別・・六種類の内的機能とそれらに対応する外的対象。
肉体的であれ心的であれ、なものとすることを感知するのは識別である。
心は、物質に対する精神ではない。心は、機能、心的な事象を感知する器官。
心は、他の機能と同様に、制御し発達させることができる。
心の感知するアイデアや考えも世界の一部である。肉体的体験に依存し、条件付けられている。
- (4) 意志・・意志という集合要素、すべての意図的行為が含まれる。
「私がカルマ(業と呼ぶのは、意図である。意図があつて、人は身体・口・心で行動する)」。意図的行為だけが、カルマの結果を生む。

意図とは、心的構築、心的行為である。その役割は、心に指示を与えること。

意図にも、内的機能とそれらに対応する外的対象とに関連して、六種類ある。

- (5) 意識・意識という集合要素、六つの機能(目・耳・鼻・舌・身体・心)のうち、どれか一つを基礎として、それらに対応する六つの外的対象(色形・音・匂い・味・接触)できる物・心的対象すなわちアイデアや考えのどれか一つに対する反応や返答。意識は対象を認知しない。対象が存在するという事に気付く感知の一種。

基本の理論

〈物質に対立する自己・魂・あるいは自我、永続的・不変の精神は存在しない。〉

〈意識は、物質と対立関係にある精神と見なされるべきではない。〉

「私は「意識は条件から生起し、条件のないところに意識は生起しない」と繰り返し、さまざま方法で説かなかったか？」

「意識は、物質を手段とし、物質を対象とし、物質に依拠して生起し、喜びを求めて成長し、増大し、発展する。物質の代わりに感覚・認識・意識に関しても同様である」

〈因果律に従って、一つのが消滅し、それがつぎのものの生起を条件付ける。その過

程で、変わらないものは何一つとしてない。そのなかで、持続的「自己」、
「個人」、あるいは「私」と呼べるようなものは存在しない。　「無我」

〈五集合要素の背後には、存在も私もない。〉　「五蘊皆空」。

〈思考の背後に思考者はいない。思考そのものが思考者である。〉

〈要するに、存在するのは五つの集合要素である。存在・個人あるいは私と呼んでいるのは、この五つの集合要素の結合に対する便宜上の名称にすぎない。それらはすべて無常であり、絶えず移ろうものである。二つの連続する瞬間を通じて、同一であり続けるものは何一つとしてない。すべては、一瞬ごとに生起し、一瞬ごとに消滅し、流転を続けている〉

「人の命はこの山間の流れのようなものである。世界は絶えず流動し、無常である」

「苦しみは存在するが、苦しむ主体は存在しない。」

行為は存在するが、行為主体は存在しない」

第三章 第二聖諦 ドウツカの生起

「生起する性質のものは、消滅する性質のものである。」

〈私たちが生と呼ぶものは、肉体的・精神的エネルギーのコンビネーション、五集合要素のコンビネーション。〉

第四章 第三聖諦 ドウツカの消滅

ドウツカの継続から解放され、自由になることができる、ということ。

〈ニルヴァーナ…条件付けられたものの沈静、あらゆる不浄の放棄、渴望の消滅、無執着、停止……悪からの自由、無知からの自由……心は囚われがなくなる、……自分のうちに純粹な平静がある〉

「純粹な生は生き終えられた」

「…そう理解した者は、絶対叡智を具えている。なぜなら、すべてのドウツカの消滅の智識こそは、絶対的聖なる叡智だからである」

「この真実に依拠した解放は不動である」

基本の原理

〈ブディズムという絶対的真理とは、世界には絶対的なものはなく、変わることなく永続する絶対的な自己・魂あるいはアートマンといったものは内にも外にもない、ということである。〉

〈ニルヴァーナは原因でも結果でもなく、それを超えたものである。瞑想のような創造された神秘的・精神的・心的な状態ではない。真実は実存し、ニルヴァーナは実存する。人ができる唯一のことは、それを見、それを体現することである。〉 ?

「人は、聖なる生を、ニルヴァーナを最終ゴール・目標・究極終着点として生きる」

これは超越を控えている? 〈ニルヴァーナの先には何もない〉のだから。

〈ニルヴァーナを体現するのは、体現すなわち叡智である。体現の背後に、何か別の自己など存在しない。〉

「この背丈大の身体に、世界、世界の生起、世界の消滅、世界の消滅に至る道のすべてがある」

〈四聖諦のすべては五集合要素、すなわち私たちの内にある、ということ。〉

〈これはまた、ドウツカの生起および消滅を司る外的力は何もない、ということ。〉

〈ニルヴァーナは今の世で体现するもの。〉

第四章 第四聖諦 ドウツカの消滅に至る道 中道

八正道

①正しい理解、②正しい思考、③正しいことば、④正しい行ない、
⑤正しい生活、⑥正しい努力、⑦正しい注意、⑧正しい精神統一
これらは、次の三つの基本を増進し完成することを目的としている。

倫理的行動、心的規律、叡智

一、倫理的行動…③正しいことば、④正しい行ない、⑥正しい努力

〈ブツダは、「多くの人の利益のために、多くの人の幸せのために、世界に対する慈しみから説いた」〉

〈人間が完全な人格を養成するために、注意深く啓発しなくてはならない二つの資質。

一つは慈しみ(情緒的側面)、もう一つは叡智(知的側面)〉

〈③正しいことば…真実を語り、友好的で慈悲深いことば、快く優しいことば、そして、意味深い役に立つことば。〉

〈軽率に話してはならず、発言は正しいときと場を心得たものでなくてはならない。もし、何か有益なことが言えない場合は貴い沈黙を守るべきである。〉

二、心的規律…⑥正しい努力、⑦正しい注意、⑧正しい精神統一

⑥正しい努力とは：正しく健全な心

⑦正しい注意とは、身体の活動、感覚や感じ、心の動き、考え・思考・概念と物事に関するは、はっきり意識し、気を遣い、注意すること。

これは、わたしが日ごろ唱えている「身体を感じ、感受を観察し、心を観察し、もろもろの事象を観察し、熱心に、よく気をつけて、念じていて」に対応しているようだ。

心の動きに関しては、〈自分が欲に動かされていないかどうか、憎しみに駆り立てられていないかどうか、惑わされていないかどうか、散漫になっていないかどうかを観察しなくてはならない。〉

考え・思考・概念とものごとに関しては、〈それらの本質、生起と消滅、発展、およびどうしたらそれらを抑制し破壊できるかをしらなければならぬ。〉

⑧正しい精神統一（瞑想または禪）の四段階

第一段階…情欲と不健全な考えが取り除かれ、喜びと幸せの感情が伴う。

第二段階…すべての知的活動は抑圧され、平静と心の一点集中状態が発達し、

喜びと幸せの感情が保たれる。

第三段階…アクティブな感覚である喜びの感情はなくなり、

幸せの感情は残り、それに心の平静が加わる。

第四段階…幸・不幸・喜び、悲しみといったすべての感覚がなくなり、

ただ純粹な平静と自覚だけが残る。

三、叡智…①正しい理解、②正しい思考

②正しい思考とは、すべての生き物に対する無私無欲な放棄あるいは無執着、愛の思い、非暴力の思いである。

①正しい理解とは、ものごとのありのままを理解すること。究極実存を見る最高叡智。

へ八正道とは、一人ひとりが、自らの人生において、歩み、実践し、開発する道である。

それは、身口意の自己規律であり、自己啓発であり、自己浄化である。

それは、信仰、崇拜、儀礼とは無関係である。

それは、道徳的、精神的、知的感性を通じての、究極の実存、完全な自由、幸せ、平和に至る道である。∨

第六章 無我

基本の理論

〈無我の教えは、五集合要素の分析と「条件付けられた生起」の教えの自然の帰結であるいは付随的命題である。〉

〈世界には絶対的なものは何一つ存在しない。すべては条件付けられたものであり、相対的であり、相互に依存している。〉

「条件付けられたものはすべて無常である。ドウツカである」

「すべてのものは、無我である」

因縁

〈条件性、相対性、相互依存性に基づいて、すべての生の存在、継続そして消滅が、十二項目からなる「Aを条件として、Bが生起する」という定式によって説明される。〉

〈何かが絶対的主因であるとは見なさない。〉

自由意志も条件付けられている

〈意志も条件付けられている。いわゆる「自由」自体も、条件付けられており、相対的。〉

〈絶対的に自由なものは、肉体的なものであれ、心的なものであれ、何も存在しない。もしも自由意志を条件から、あるいは因果律から独立したものとするとするなら、そのようなものは存在しない。すべての存在が条件付けられて、相対的であり、因果律に律せられている以上、意志が、あるいは別の何かが、条件なしに、因果律から独立して生起することとはありえない。〉

死の直前の言葉。「アーナンダよ、自分自身をよりどころとし、自分自身を避難所とし、他の誰をも避難所とすることなかれ。ダルマ(法)をよりどころとし、ダルマを避難所とし、他の何ものをも避難所とすることなかれ」